

信の歴史性

小野 蓮 明

親鸞の宗教は端的に信の宗教と云われる。その信は往生成仏の因として「如来より賜りたる信」「願力廻向の信」と示される。親鸞は「夫以獲_レ得信樂_一発_三起_三自_三如来選_レ願心_一」と云つて、信樂は遠く如来の願心より発起せるものであると云う。然しまた、信心は私のものであり最も具体的な宗教的自覚であることに於て我々の開発せるものであることも否めない。信心が開発にして発起、発起にして開発なるものとして顕彰されているところに親鸞の信の著しい特徴がある。信心の生起が超越的生起という意味を有つが故に、「眞実信樂実難_レ獲」「信樂受持難中之難」と云われ、従つて遇浄信を獲得れば遠く宿縁を慶べと云つて、信心が常に喜愛心、廣大難思の慶心と彰わされるのである。ここでは、眞実信心が難信と云われるところに、信心の成就の歴史性があることを見る。

願力廻向の信心とは、阿弥陀の本願が衆生に信心として成就することである。かかる廻向成就ということの教証を、親鸞は本願成就文に見出されたのである。蓋し本願成就

ということとは、本願が果力たる南無阿弥陀仏の正覚を成就したという客觀的事実を指すのでなく、聞信歡喜の一念に「至心に廻向し給へり」と主体的信の成立を意味する。この一念に仏も正覚を成じ衆生も往生決定するのであつて、信の成就を外にして本願成就を明らかに出来ないのである。然るに親鸞は、本願成就が衆生に信心として廻向成就することであることを、本願成就文の読み換えに於て明確にされた。即ち本願成就文について、前半を本願信心願成就文とし後半を本願欲生心成就文として分ち、中間の「至心廻向」を「至心に廻向し給へり」と訓読することに依つて、その義を見出されたのである。このような領解の基づくところは曇鸞の解釈である。曇鸞は、本の法藏菩薩の四十八願に依り今日阿弥陀如来が成仏され、阿弥陀如来の自在神力が四十八願を自覚するということを、「願以_レ成力、力以_レ就願、願不_レ徒然、力不_レ虚設」と云つて、因願成就は相即せる矛盾の同時成立でなければならぬことを明された。本願に於て仏力を感じ、仏力に

於て本願を感じる、これが内観の道であり、そこに純粹な歴史観がある。この見地から、天親・曇鸞に於て願生行者の五念門の一つであつた廻向を、親鸞は如来の本願力廻向と「利行満足章」駁本釈から逆見せられて証知されたのである。

親鸞は『論註』に依つて成就文を照らし、成就文に照らして本願を明らかにするとともに、その特色を発揮されたが、然し本願成就文を成就文と見ることは親鸞が始めてでなく法然に於ても云われて来たことである。然し法然まで「其の名字を聞いて信心歓喜して、乃至一念至心に廻向して」と一連に読まれていたのを、それを三段に区切つて訓読されたのが親鸞である。若し成就文を一連に読むならば、「乃至一念」は行の一念となる。然るに親鸞が成就文を読み換へられたということは、法然所釈の行の一念から信の一念を開いて信一念業成義を明示されたということである。それは行の一念を信の一念に変更したということではなく、行の一念に即して信の一念が見出されたということであつて、念仏往生の願が正しく衆生に真実の信心として成就することの明証である。

親鸞の成就文の読み換えは、至心信樂の願成就を至心発願や至心廻向の願、特に至心廻向の願成就とは異なるそれ自体の意味を明瞭にせんがためである。成就文の聞其名号や至心廻向も、願文として出ているのは第十八願でなくて第二十願であり、そこに両願の深い内面的關係を看取し得る。而して

信の歴史性（小野）

この両願を俊別せるものは信心の自力他力性であつて、主体的には親鸞が至心廻向の願成就文に相当するものとして『大經』の智慧段の経文を以てしている如く、仏智疑惑の罪の自覚である。至心廻向は廻向する廻向の立場であつて、深い主体性の固執である。然し翻つて思へば、至心発願も至心廻向も既に実存の段階であり、宗教心の歷程である。至心発願の願文に「発菩提心」とある如く、宗教心が人間を出発せしめているのである。然し今や宗教心は自らの内に自己そのものに背反する自己の固執を見るに至る。信心は自らの内に見出す罪の自覚によつて却つて信心となるのであり、かかる自己を超えて自己を成就してゆくところに信心の歷程、信心の歴史的成就があるのである。而して信心の歷程を成り立たしめているもの、それは固執の罪を超えて尚も苦悩の有情を摂して、如来、如来たらんとする無底の大悲心、本願の欲生心である。衆生がその立場を超えて実存と成るのは、衆生を深く超えた根源底からの喚びかけ、「欲生我国」に依る。それは二河譬の「汝一心正念直来我能護汝」という西岸上の招喚に感知される如く、願生道に於ける「我」が本願の招喚に於て「汝」と云われ、却つて如来が「我能護汝」と自らを「我」と名告る世界である。そこでは自己の根源乃至根底が逆に自己と成り、根源的自己と成るのである。

このように本願の欲生心とは、我が汝として見出され、如

来が却つて自らを我と名告られる如き自己実存の内奥直接の声である。さればそれは機の中の更に機であるとも云えようか。三願転入の枢機ということも、実はこの欲生我国の廻向心にあることを、親鸞は感得されたのである。本願が本願自らを自証する原理は欲生我国であり、この欲生我国の自証から第十九・二十の方便の願が開かれたのである。従つてそれが方便の願と云われても、真実に依る方便の願の意味であつて真実の願の具体的内容とならなければならぬ。既に親鸞が方便の願の意底を洞見されて「既有悲願」と云われている所以である。然らば第十八願は何処から出たか。第十八願も亦自らの欲生我国から出て来たのである。第十八願の欲生我国は、内に能信の信樂が他力廻向であることを証明し、外に第十九・二十の願をそれから開顯し、而も両願の自力廻向性を否定しながら大悲誘引せんとする。欲生心は如来招喚の勅命として如来の救いの原理であると共に、又救いを自証するところの原理である。

かくて如来の至心は本来的に至心廻向であり、「廻向は本願の番号をもて十方の衆生にあたえたまう御みのり」である。聞其名号信心歡喜乃至一念は至心廻向であつて、至心廻向に依つて信心を賜わるのである。信心を番号に賜わるのである。因願に於て諸仏称名の願と至心信樂の願が各々独立しながら、成就に於てそれが深く關係づけられている所以であ

る。本願の成就は廻向成就であるが、廻向成就は衆生に信心として成就するということである。本願成就は「今現在成仏」と表現されるように、成就するとは現在することであり、現在は今の時にある。然し今は忽然たる現在ではない。親鸞が「信樂開発の時尅の極促」と示された成就の一念は、「如来選択の願心より発起」せるものである。信心の現在が現在たり得るのは、現在が現在までに成つた経歴が信心の現在を現在たらしめているのである。信心の時は現在と云つても、現在の中に「今已」「今既」という現在にまで成つた経歴が成就している。現在はその経歴に依つて生起している。至心信樂は至心発願や至心廻向の経歴を有つている。信樂開発の時尅の極促からすれば、発願も廻向も信樂開発の歴史的必然の契機である。それを契機となし経歴を成り立たしめるものは外ならぬ欲生我国の願心である。「真実信樂実難」獲」という信樂の難は、信心の経歴にあるのである。難は信樂開発の客易ならぬことを表わすが、至心廻向の願こそ至心信樂に難の意義を賦与するものである。従つて、他力廻向の信心と云うことを真に証明するものは果遂の誓であると云い得る。第二十願の欲生我国の自覚のところに歴史的自覚がある。勿論その根源は第十八願であるが、本願力廻向の発見は第二十願の自覚にあると云える。かかる自覚の根柢を示されたのが本願成就の文の読み換えなのである。